

Title	楊井克己編 世界経済論
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.436(90)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0090
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0090">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0090</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的考察——一九五五 (三)「価値形態論」一九五七 (四)「交換過程論」一九五八 (四)「貨幣の資本への転化」一九五九 (四)「貨幣価値の本源的规定——貨幣商品・金の価値の決まり方」一九五四

以上の論文中、第一部、(一)、(三)、および(四)には改訂が加えられている。(ミネルヴァ書房刊・A5・二八六頁・五五〇円)

—持丸 悦朗—

楊井克己編

『世界経済論』

この書は、世界経済論と題する他の書に比して、きわだった一つの特色をもち、それが長所であるとともに、もし批判が存するとすれば、やはりその点に問題が残されよう。

すなわち、一般に世界経済論は、理論的にはその明確な概念規定を目指しつつ、一つの統一ある方法に基づいて、世界経済の生成・発展・動向が分析されるのが常であるのに対し、この書では、こういった従来のいき方は全く異なり、その対象を、第一次大戦と第二次大戦との間(一九一八年一月〜三九年

九月)の二十一年間に限定し、この期間の異常かつ変則とみえる世界経済過程を、アメリカの拾頭を中心とする世界資本主義の変化として統一的に分析を行なっている。

分析方法は、いわゆる宇野理論の適応として(この書自体、宇野弘蔵監修の経済学体系七巻中の一巻である)、世界経済論を段階論として構成しようとし、両大戦間のこの時期も段階論に傾斜して処理し、それに基づいて現状分析を行なおうとするのである。しかし全体としては、豊富な資料を用いての現状分析に終始して、明確な段階論としての断定はなされていないように思われる。

構成は第一次大戦前の世界経済を手短かに論じた序章をのぞき、過程・実態・通商政策の三篇よりなり、楊井教授・川田侃助教授を中心とする八人の研究者達のよくまとまった共同研究の所産である。まず過程においては、賠償問題と金本位制の再建と崩壊、その結果としてのブロックの形成が、実態では貿易・国際投資・国際収支の三つから、通商政策では関税・貿易統制・特惠および互恵通商政策が論究され、かくて両大戦間の世界経済の構造と動向とが、主として、第一次大戦後世界

経済に指導的地位を占めるようになったアメリカを中心し、イギリス・ドイツ・フランス各国のからみ合いから明らかになる。この時期は、まず大戦の打撃から立ちあがるための一八〜二四年の再建期を経て、金本位制の復活に代表される二五〜二九年の相対的安定期を迎えたが、それはあくまでも表面的なものにすぎず、二九〜三九年の崩壊期(さらに分ければ恐慌期と解体期)に陥らざるをえなかった状態が、各篇において明確に分析されている。

このように両大戦間の期間に集中して、多方面からの分析を行なった書物として、本書は非常に貴重な存在であり、その豊富な資料とともに我々の大いに参照にすべき点も多く一読に価するものである。しかし、この内容に世界経済論という名を冠することに疑問が残るし、さらに段階論の規定をもっと明確にするなりして、もう少し長期的な視野での分析をつけ加える方が(読者にその任がまかされていくのかもしれないが)いいのではないかと思われる。(東大出版会・昭和三十六年二月・A5・三九四頁・五八〇円)

—深海 博明—